再びブライズ先生を訪ねて

Revisiting the Grave of Professor R.H. Blyth

棟居　禮子
MUNESUE Reiko

Abstract: On April 16th, 2012, I revisited the grave of Professor R.H. Blyth at Tokeiji Zen Temple in Kita-Kamakura, as I wanted to show him the Programme of Dr. UEDA's new Noh play "The Cherry Blossoms by the Potomac－A Dream of Yukio OZAKI and Abraham Lincoln－", which was performed at Umewaka Noh Theatre in Tokyo on April 6th, celebrating Washington's Potomac Cherry Centennial. I had heard much about Dr. Blyth from my elder brother even before I read Dr. UEDA's *Thank You, Professor Blyth* published in 2010. My brother, Minoru TADA, was a professor of English at Otani University in Kyoto and wrote a book titled *Bukkyo Tozen* (in Japanese) (Buddhism Moving Eastward), in which he discussed R.H. Blyth together with D.T. Suzuki. The spirit of Blyth seemed to be happy when I showed Professor UEDA's "Noh: Potomac Programme", turning its pages. He seemed to be saying, "Thank you for showing the Programme this time. The Noh play seems to be a good play. I never dreamed Mr. Munakata would write a book about me as well as the scripts of new Noh plays and perform them." I told him that he and Professor UEDA were strangely born under the same star between 36 years. As he asked about me, I told him that my grave is supposed to be built at Engakuji Temple cemetery close to his grave, so we can talk a lot and read Basho's haiku aloud whenever we like even after my death. We talked about an hour eating sandwiches together, and I left him as my husband was expecting my return.

Key words: R.H. Blyth, Tokeiji Zen Temple, D.T. Suzuki, Kuniyoshi Munakata UEDA, Yukio OZAKI, Abraham Lincoln, Potomac Cherry, Minoru TADA　R.H. ブライズ、東慶寺、鈴木大拙、上田（宗方）邦義、尾崎行雄、エイブラハム・リンカン、ポトマック桜、多田　稔

四月六日「能・ポトマック桜」の上演を楽しみにしていたのに、私は数日前よりひどく体調を崩し、当日は眩暈、頭痛、吐き気で起き上がることも出来なくてとうとう断念した。

京都の兄（協賛者）から送られて来たチケットは早目に友人二人に二枚づつ届けておいたの

で、夫々親友を誘って喜んで観能して下さった。
　ご近所の〇夫人は元ＪＡＬの国際線スチュアーデスをしていた、さわやか美人である。彼女は昨年三・一一の東日本大震災の後、観世宗家の義援能（小鍛冶と杜若）を観て以来「能」に興味を持ち始め、「又、誘って下さいね」と云っていたので、「ポトマック桜」は招待することにしていて、一緒に観能するのを楽しみにしていたのである。

　翌七日〇夫人は「ポトマック桜」の番組を届けに来てくれた。フラフラしながら私は何とか門迄出て、彼女の話を聞いた。舞台は美しい桜の花で飾られ、演者は一生県命に謡い、語り、舞い、見所は国際色豊かでほぼ満席だった由、上田先生の解説は日・英半々でなかなか良かったと。彼女の親友は今回が初めてだったそうで、「こう云う世界もあるのねー」と感動していたとか。

　私はその後、番組に目を通し、シテの次第、名宣、サシと節、調子が頭に浮かび、当日の舞台を想像することが出来た。「能狂ひ」と自他共に認める程、あちこちの能楽堂へ出かけ、又、真夏の能面、能装束の虫干しを見せてもらい、各大学で企画される能楽講座に出かけ勉強して来たおかげを心密かに喜んだことだった。

　番組を読み終わって、「そうだ！」と思った。
　「この番組をあの人に見せて上げなきゃ」

　四月十六日、何とか調子が戻り、着物を着、帯を〆たら、シャキッとし、東慶寺へと急いだ。久しぶりの花の寺はしだれ桜が満開で見事だ。白山吹、ドイツすずらん、やぶ椿、青紅葉が美しい、鶯の音（ね）もどこからか聴こえる。何時訪れても閑かで心安らぎホッとするお寺である。
　大拙先生の“水月”の文字と水月観音様に会いたいけれど又の日にして、今日はとに角、不来子（ブライス）先生にこの「能・ポトマック桜」の台本をお見せしなければ、一番観たい人だろうから。

　左手に茶室が見え、間もなく咲き揃うだろう菖蒲田を過ぎ、右手に井戸が見えて来た。冷たい水で手を清め、ゆるい坂を上って左に入ると大拙先生夫妻のお墓、その一段上に不来子先生のお墓。珍しく一本の草も生えていない。(作夏しっかりと草取りしたからか)。

　家から持参した一人静、二人静、海老根欄、紫欄、今年初めて咲いた肥後椿の花を供え、おいしいお茶を水入れに。クッキーとサンドウイッチ（中味は「痛い」と云わない卵とトマトとレタスのみ、ハムは入っていませんから安心して召し上がって下さい)。奈良興福寺のお線香は

とてもいい香りがして、きっと不来子先生も気に入って下さるだろう。

「ポトマック桜」の台本を一枚づつめくりながらゆっくり読んでもらう。
「なかなかいいお能ですね。」
と声が聞こえて来た。
　その時、墓石の上にブライズ先生の顔が現れた。「ブライズ先生ありがとう」の六十九ページの顔だ。
　ブライズ先生と私はサンドウイッチを食べ緑茶を飲みながら、一時間近くお話をいたしました。

　「あゝ又あなたですか。“ブライズ先生ありがとう”の本も今回の新作能の台本も見せてもたって本当に嬉しいですよ。上田君は実に熱心な学生でしたよ。私が彼岸へ逝って四十八年、私のヒストリー書いてくれたり、「ポトマック桜」新作能を上演したり、存命の頃夢にも思わぬことでした。嬉しい限りです。ところであなた如何なる人にてましますぞ」

「これは港横浜に住む女なり。詳しくは又の日に申し上げましょう。

　ブライズ先生のことは兄から常に聞かされ、（兄は六高時代から大拙、ブライズ先生に傾倒していて、大谷大学で英語を教え、七十才の時、帯広大谷短大へ。六年間学長を務め、今は京都で静かに暮らしています。大谷大学時代“佛教東漸”と云う本を出し、その中には大拙、ブライズ先生のことが書かれています）上田先生から一昨年四月末に“ブライズ先生ありがとう”を贈っていただいた時は、一気に読ませていただきました。
　とても読みやすく温かい文章で、ブライズ先生にお会いしたことのない者でも、読み終わると、どこか懐かしい気持ちが湧いて参ります。中でも巻末の「R・H ブライズ関連年譜」は見事なもので、ブライズ先生の教え子ならではのものが感じられます。

　ブライズ先生の“志”を継いでいらっしゃる上田先生です。ブライズ先生の輪、大きな大きな輪が出来ています。兄も私もその輪の中の一人だと思っています。

　昔から東慶寺さんとの御縁あって、お茶会に何度か出席し、岩煙草の咲く頃、松ヶ岡文庫の催し、水月観音様にも二度お会いし、兄は「佛教東漸」の本を出す前、東慶寺さんで色々資料をみせていただいたりしたそうです。

　御縁とは不思議なもので、私は終の住処が円覚寺、白雲庵の裏山ですから、そこに逝けば、

ブライズ先生と隣り組でございます。

その時は東慶寺と円覚寺を行ったり来たりして積るお話をいたしましょう。私の処から富士山、大山連峰がきれいに見えますから、晴れた日には私方へ雨の日は東慶寺さんでお抹茶でも点てて、芭蕉の俳句を声を出して詠みましょう。

霊魂の不滅を信じ、肉体は土に戻っても魂は消えないでしょうから。

ところでもう一ツ不思議なことがございます。

ブライズ先生と上田先生は同じ星で「三碧木星」なのです。

御存命なら百十四才になられるブライズ先生の四段下に、今年七十八才になられる上田先生が。私は星の相性を信じる者の一人で、これは目に見えない不思議なものです。

ブライズ先生、長話をしてしまいました。春の夕暮れとなりましたので、お暇申します。又、伺います。おいしい紅茶を持参いたしますので、楽しみになさって下さいませ。

では又、ゆっくりお休み下さいませ」

そう云って、東慶寺の急な石段を降り、北鎌倉駅へ急いだ私。

“縁切り寺”とは縁もない“縁あり寺”である。

家でおなかを空かして待っている（今年で五十二年連れ添う婿殿）愛すべき男性（ヒト）が・・・。

平成二十四年四月二十八日　夜